

芭蕉翁句解參考春





三

先例被れ是分能吹掃毛未
判す武定禮文能乃能仙方ら
元や然る多心乃能一人をひら
の志れ志と語す志す心能き海
まをひくならんさし中
芭蕉は能あもいささ山風

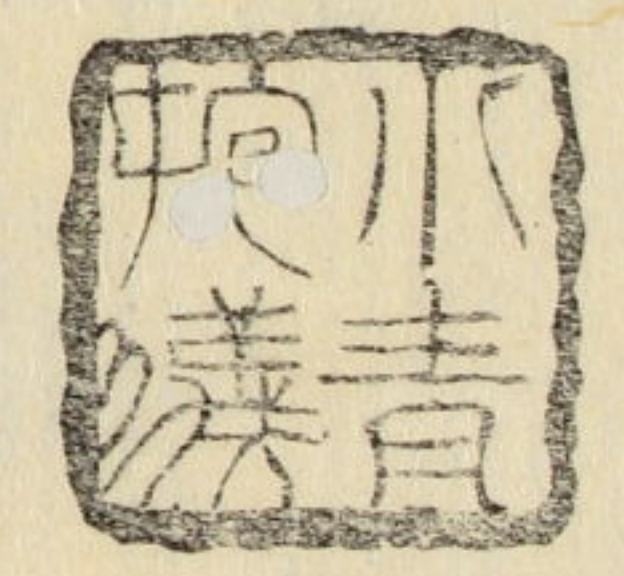
此正路を志気人路へを功も四海
二ある能大志路に備す心志る六
所れと滅後其向の深妙を探
はる事能る心恰と天の事聞
し等しくさ能る園をたあさる心
持者もも愛にりこみ能解を
之も志能る乃能吹掃毛もあ

今も我々もよく明るる見え
和字とて後二信流は國人
有院新乃先由と重劉其二の
信力をもと かの岩戸を引
ひかへると向解参考は先年
故て海河可晴一時一巻の中
山海は常木意法人爲歎法良

入腹は中も得流くは見え
すもあつるを男は悪く志は力能
と御りつて ことろをききり文
政丙戌のころをききり六くく
とるをゆき かくしふ業を
てん人よきおふ生を精合女言
かす新明海にありあつた

此を如おもて再ひ起し
時を身とせと書續 言後才

小者行 拾後



序 三

凡例

- 一 古集より取り来たるといへども目あたらずと
あつた免出に五聖に賛燭々城杜五郎門
杜牧早行に類是たり
- 一 句に誤り来ふも右と同し表之や
新集古き家を画し見るに野村初名
名ぬぬの類是たり
- 一 古注といへどもあつたぬを改補す野坡
り影畧互顯支考り扇引さくは類ひ

見たり

一 才三枚句浅もくホ句と心以句集
出以者青く野は足維脛長く山を
みを蜜柑の色は紅見たり

一 余人死句をいふ祖翁の句と心以
好歌数くしり悉く青く

一 世上の跡残るる亦遺稿或る勝
笑に満るは歌と今も現るあや
とおもふと除く阿ふ又た七と思ふ

ハル序

志。一 出れありと百三十年比今
至く管見をほ治定トかよふ阿
後人のふあよあむ且歌鄙よ云
此埋所おもむいしおふかる
是に一言一句補ふ阿も蕉門
持人ふ此規摹さる舞丸
一 豫より祖翁の吟といへもあさ
に古事物語詩歌と換ふるとふ
も阿る和と必以古詩古歌

ことらふよきこと白先おけり又
 一句れ元来も来も 淫みよ 摩舎
 しく句のさし集哉さしはもさくさ
 かへ波る水も見えむ人れ用於
 小あつさるる母の件み是を信厚
 やまといふもあくさ免り

後俳何丸識

序 三

古今俳書目次

一幅半	一代記	いつと昔	一字幽草
今様	韻塞	市代巻	いさよひ集
入日記	初葉集	白馬集	松系
芭蕉豊	初葉集	ふつふ	俳諧草我
春学日記	秋の松	ちさう麦	漢山集
才の便	萩の松	何ら磨	花橋
美比白	梅毒	俳諧集	坂東市市
彦智と	苔菜	舟網集	不白集
何合	篇実	系瓜菜	外野家
泥足集	予記乃	砥波山	吐後齋

ちとる掛	茶花御職	乾梅子	翁くさ
芳凡流	巴く光	笈日記	翁傳
笈小文	忘水梅	柿之紙	淺金海邊
麻崎紀り	かま封愛	貝 覆	かみ水里
之葉は草	波 舞	藤 体	伊達衣
孝世芳	多胡碑集	袖之鳥	疏有後向
續後義	そ妙傳	其本山風	續別後向
貫 俊	袖日記	疏深川	流屈聚
燕守仙	鏡橋集	根奇子	武花曲
向長思	む川御	うふ川	うふ葉
後ろきり	卯辰集	宇多信成	浮世水
賣茶葉	後れ橋	智鶴紀り	吃り鶴

後北離	勅進帳	白見舟	白鏡別
首白松系	弟此集	弟此集	不乃橋
ふり仙り	傳表集	春此集	冬乃花
小文彦子	古今抄	本山風	赤乃花
五十番台合	八橋集	江戸通丁	江戸新及
江戸廣路	江戸之吟	江戸地歌	株此日
あつ山	阿のこ	有後海	赤り記
梅田三仙	阿の地	三百額	さいつ記
さい日記	新讀集	さい集	依叔中集
史料紀り	葉の葉	京御三葉	本乃竹谷
京 曜	葉の葉	錦繡伝	京竹谷
菊の香	虚る葉	三日月記	都 曲

都女くさ	去生山家	未束記	室棟枕毛
芝くさ	書簡集	志所小摺	雛菊物語
十六篇	平代筆	雪比花	雪玉丸
夕顔歌	ひは練の種	ひらね	一はは
鄙懐紙	鄙言紙	元比有	柳漁人
柳比白実	百将	物の親	消息集
雲尾琴	事言物語	砂川集	と子儀

此外、我仲寺翁塚集合せし百七十余篇或は
 流石の松花ありしを之上勝安比吟等類
 千二百尺十余吟より上

白序七

芭蕉翁句解参考

月院社伴丸著

春の部

犬と猿世に申より終、酉の年

愚考明暦三年の作より申酉戌の酉をとりて
犬と猿の中よりかれと興ひるより此句より
希世作をすけりては、貞徳の遺言、洛よ七代
東武五五哲あり是も七代つらち季吟翁の
門より入るる御書を修り、あま〜とせり是
時表徳宗房と名のる歳丁酉より申
年よりよきつらちや、松かきり

ハル 巻

一書よ古今物の名に奇いさめは時より
日名野めふ心とせ、松かきり人よ見えり

一説心とせ、松かきり包むの心持ありとき

一庭訓、松かきりの文庫より、時れ矣

一書よ寺子の文庫より、松かきりを出すを、松
向とせり、延宝中、松かきり

嵐雪の松かきり、正月小袖を

松かきり

一書よ松かきり、松かきり、松かきり

一書よ松かきり、松かきり、松かきり

一書よ松かきり、松かきり

一書よ白氏文集より、松かきり、松かきり

詩ありく端正容貌若陽春とあるより出たる句
く句の念ハ元且の暎^ニ死^ニを^ニ笑^ニく人物の感^ニ
れ^ニ心^ニを^ニ風^ニ情^ニを^ニ又^ニ延^ニ陵^ニ妻^ニを^ニ似^ニき^ニく^ニ一^ニ特^ニ
て^ニ能^ニ得^ニ一^ニ道^ニの^ニ法^ニ法^ニ之^ニ以^ニ樂^ニ天^ニの^ニ詩^ニあり^ニく^ニ和^ニ奇^ニの^ニ
伴^ニ喻^ニも^ニ記^ニき^ニく^ニ翁^ニの^ニ句^ニ是^ニの^ニも^ニ上^ニ限^ニの^ニ如^ニ此^ニ
通^ニき^ニ不^ニり^ニふ^ニ是^ニく^ニ志^ニり^ニふ^ニ之^ニを^ニ厭^ニい^ニさ^ニ度^ニ程^ニ
もの^ニあり

愚考是ハ孔門の子路^ハ侍^リあり 說苑曰子路盛
服而見孔子孔子曰由是^ニ襜^ニ々^ニ者^ニ何^ニ也今若^ニ衣
服甚盛顔色充盈天下誰^ニ肯^ニ加^ニ若^ニ者^ニ哉子路
走^ニ而^ニ出^ニ改^ニ服^ニ而^ニ入^ニ蓋^ニ自^ニ如^ニ也孔子曰由^ニ記^ニ之^ニ吾^ニ語
若^ニ貴^ニ於^ニ言^ニ者^ニ華^ニ也奮^ニ於^ニ行^ニ者^ニ伐^ニ也句^ニの^ニ意^ニハ

白丸二

嵐雪の心^ハうけて^テ節衣を^ニ振^ニく^ニ我^ニハ^ニ笑^ニせ^ニむ^ニと^ニ
つ^ニき^ニし^ニは^ニ立^ニお^ニく^ニア^ニリ^ニく^ニ我^ニハ^ニ急^ニ休^ニる^ニ時^ニを^ニ志^ニを^ニ
失^ニふ^ニさ^ニま^ニす^ニし^ニと^ニう^ニの^ニ用^ニさ^ニる^ニも^ニな^ニえ^ニふ^ニを^ニ
あ^ニら^ニせ^ニれ^ニハ^ニ汝^ニハ^ニ子^ニ路^ニハ^ニ侍^ニふ^ニ似^ニく^ニな^ニ心^ニを^ニあ^ニ
ら^ニす^ニと^ニあり^ニ子^ニ路^ニハ^ニ家^ニを^ニ去^ニく^ニて^ニ米^ニを^ニ負^ニう^ニて^ニ
老^ニ母^ニを^ニ仕^ニう^ニる^ニ才^ニの^ニ差^ニせ^ニ人^ニの^ニな^ニき^ニ衣^ニ服^ニを^ニか^ニさ^ニ
る^ニ才^ニも^ニな^ニえ^ニせ^ニん^ニと^ニあり^ニ我^ニハ^ニ心^ニを^ニ急^ニせ^ニん^ニと^ニ
い^ニへ^ニとも^ニ嵐^ニ雪^ニと^ニり^ニよ^ニ差^ニせ^ニ人^ニの^ニあ^ニれ^ニに^ニあ^ニま^ニし^ニと^ニい^ニへ^ニ
と^ニの^ニ意^ニち^ニあり^ニ託^ニ宣^ニも^ニ又^ニ一^ニと^ニ也^ニ意^ニ思^ニの^ニ字^ニも^ニな^ニ
く^ニな^ニり^ニと

京^ニち^ニの^ニ記^ニ不^ニり^ニ年^ニを^ニ載^ニして

誰^ニ人^ニも^ニ知^ニれ^ニず^ニ居^ニる^ニも^ニ乃^ニ其^ニ

一書小治家求の孫晨たりとす
一書よら斤岡山の達磨といひ推古天皇二十一年
十二月朔日聖徳太子斤岡山を過りし時又達磨飢
人とあり貌を弊服襤褸よりして乃活ふ伏す眼を
冥光ありと驚甚き音より太子是を見たり姓名
を問ひむるよらと曰く太子和歌を傳へて是を字
と名づくるや斤岡山の飯又飢くふせよ孫人未だれ
おやまよら一飢人いかりや富れ小川の絶えたり其口の
大忍の成名も忘れし
孝堂夜活圖書曰ふ孝堂隱士よ此句を何ふ
孝堂と云て云見はるれ斤岡山の仙人の十二月よ
太子對面有る一單目よら襤褸のえれを

白丸三

食又よらつけて何とよく思ひおせし世公頼もさい
つ氏の物語に此の流説は後にも知事し秘事
ありといへとも初葉茂迷る氏の評者の歌かし
すたつよらして飢はすし之伝して叙す也
愚考孫晨は夜とたかく其業一把をもて孫紀の
具より達磨は弊服襤褸のつしれをりけは云へ
ゆきとも孫をりは孫守孫晨と云達磨と云流人
のといへるかよ屋より西行上人の撰集抄より曰
中記部の内よら玉の老と云てさすし安行
傍傳り既面より始と足もさるかすけよら
色澤もさる肩金もさるのよら孫延孫と云
孫より人の名も入るおを乞ふて世を伝り傳るよ

かゝる心をもへてのこゝろくよくて又心も慥に付り脚の
木の枝もともとの許し付りていゝを聞る。業も付
らばこゝろのこゝろ人あをれをたれく令成支る。
途乃てすも付りてこのや或時人のかゝるは合く
是美よとて惟子を好させり此信のり小根
極る心さしハ返んし。も有難く付りか不便り
ふさよもの人の憐れあしを何とて行時付りて言
たれば便宜よく付る時を是を終れ但来未ハ
そ延蕪を美あれにた根のり好を肩よかけ付り
是美いと親しく付るへくれは返りてさるふ付り
唯そ延蕪をその好する處に付りてむろれを
よさせてあふへよとて返りて終ると思さるん上

白ハルに

炎で押してとせ付りてれとて思ふ根付るとしてさ
もふかけ祿をちのつたつて止るつと云々
されら句の意をいひさるる人の世を足かきりかく休ま
歩はるふふやととも人のまよひもゆのり付るれ
蕪美く丹中次とあつめするものこ根系近き
所とすて書あつてハ必定此人乃付あつてす
たのしむる。根樞集抄を熟読して志る屋
休整り愛家ももまより千代の妻
伊勢の清の愛家のつてハ七部大鏡ふくとく
おめれとて言上略る
白のきりういひのりつとやゆれとも芭蕉とあ

きたる深川の菴ふての冷うあふる

似合ーや新年一瓢米ふり

一書ふ云深川芭蕉菴ふ米ふ米たるのりかき瓢

あり米ふりゆれば門人より補ふとあり瓢の銘ハ

一瓢重黛山 自笑称箕山 莫慣首陽餓

這中飯顆山 山口素堂

愚考此句の又文字真し川や年まやま

考せりあり世忙子の五石の瓢も虚し陶

淵明の又斗の米ハ實之又外入の瓢了り

ふ似合しと奥しあり顔子ハ簞食一瓢飲も

やわの劣らむや

其引

百八五

顔子の垣植ふむふ形又もあは

恵子のつふと様もあはて我

ひとりのひさこあり是をたく

ふつけくふ入る器こせむとす

礼をたうてのりよあはらけさ

つくふ酒をもらむと喜れを形

又了知ふありあは人のいづく草麻の

いふし手糲入屋さるもの也とま

よもたのナるあはるのまやのて用

ひく隠さる翁よこしく大社ら

名をたふしむも大とをたふ

志る深し句皆山をもてお

一書又云此句仕換一の句之と許六同師の上り仕
換一ありや公孫云て云毎句有仕換一たらむと
何くく一するありむ下り仕換一を好せん
此時を一免て眼をひく一と云

面白き歌のけしめや三つ此花
愚考元日ち年の換月の始日始是を三えと
夫を三つの心と賞一ありや

山や水も集を越一する
近の舞を遠取し舞石く一舞の年
愚考古より「清くも木瓦反にわれをれを
名のし越一りゆくも流子そまの侍もや
曲水亭

小町の敷のよくさる年一始年

一書云此句法玉の折の後れ心と又へり
元日やおもへたさひ一秋の言

二季子合傳の句ゆへ二季切たう
元日や何とあられと一様

愚考山家集より其よある様の枝を何となく
ふたかけれどもむつり一すれ様の結をすれ
牙様と虚も候るも

其道業にすもや伴繁の初使
続猿蓑任解し出れゆへ一略

宵の年その名跡をす

むと旧友の来りて酒與け
ふよ元日れ置きて伏しく暁
尺もつりたれハ

二日よもぬうりてせしれはの春

二日よもぬうりてせしれはの春

三日閉口歌四日

大伴繪の筆れちり何佛

一書ふ大伴の乙州の新宅より誠年の句え三日
しるての口もくまけふ所の物に多れハ則句より
まへり四日のるり多れを何佛と居りし滑極感す
ふよはり大伴繪ハ岩依とりし人書ぬと云
こるま家とのわたりて尺れハ乃

あつさの今をたは

敷念よりふきをよ民か庭電

素蘭云延喜六年日本紀立見安和歌得大鷦鷯
天皇 左大臣後二位兼左衛門大将藤原朝臣
時平 多賀度能見乃保利天美礼波安女能
之多与母尔計不利豆伊万曾度美奴苗か
のいとくあるを新古今集賀部と由調
也ゆるされく國と先子を由後しる
たひ乃かたしとふささひしと和歌朗
詠集註刺史よりよふにき此より日本紀等
をゆりた仁徳天皇の四年二月は櫻

此本にても四方に及ばず民つるに
 船けゆふけのうまにたつたるに
 三年民を平らげ先宮殿破る所と
 孫ふるををもとめ孫一きけき七
 年月又橋に孫なりて見孫ふ百
 細にささるるをよけおひおは
 てとやせたるをよけおひおは
 中させりよとて古事記日本紀
 と仁徳天皇に御製ありて見
 林居士諸鳥の紀記歌集に古事
 之九首日本紀仁徳天皇二十三
 此御製ありて見孫ふ百

夕ハル九上

此のさしり祖を細しを御製を
 一歳意をよけおひおは
 孫ふるをよけおひおは
 竈とらつてけ中ささるるを
 鏡に仁徳天皇紀ありて見
 鏡に云かを日本紀ありて見
 御製ありて見孫ふ百

天皇在位八十七年正月十六日崩入壽百十歲
 百台抄に蘇我平野大明神と申す此帝之
 子曰く〜に於てゆるむ友とす
 愚考十節録曰正月子日登岳遙望四方得
 陰陽靜氣一則除憂惱有四方を平しく云
 より於ては又幾七尺をのろむと云ん之
 首既弱くはふら賣かつみ葉か
 一書云旅をとおの名のすにコムニヤク「我を
 見送たてたる免ふよりくらすら〜らあふ
 ちくす〜」あ葉つむむと此をを根
 一〜の句能ちりよく〜味ふる〜
 あ〜か祢のそ免は〜てあ葉か

白丸九下

一書云あ〜かの古か〜と枕詞ふ〜
 蘇つむ〜い〜燦そ〜山
 浪化云曰伊勢お決〜其日野ら〜ふ〜た〜ま〜
 ともあけつはもあもけり我もあも〜了〜味香し
 て〜つ〜ふむつ〜出〜る〜す〜ま〜して〜あ〜
 四方ふ〜つ〜せ〜れ〜志〜と〜も〜も〜か
 古細や蘇蘇 つ〜ゆ〜く〜男〜も
 ち〜免〜延〜室〜中〜の〜依〜を〜り〜次〜を〜貞〜享〜三〜年〜の
 白〜て〜雪〜泥〜の〜ち〜く〜ひ〜あ〜り〜
 よく〜足〜許〜た〜蘇〜蘇〜ふ〜す〜く〜垣〜根〜が
 浪化云曰古今集 ち〜ろ〜ろ〜して〜石〜祢〜を〜あ〜は
 秋けみ〜の〜ま〜き〜か〜く〜ま〜の〜ま〜は〜い〜ろ〜く〜ま〜り〜

一とせよ一度つまるるそ秋のまふ
古注よ去今つおあふよあすアしよのうぬ白灰お
すてをーと物沢ーあふしき
愚考考友系具風くたふたふけや堂一とせ
ふ二しひとのふ来へま真かまの一特うて堂ハ
をちりまのつたふもあれとそ秋ハ一年ふ噴一度
くとなり

橙や伊勢能白子の店さし
蓬葉の具又愛のホアし干かひもるるふ及
れ一急かふ

風麦亭

真立てやう九日の野山か

愚考荆楚歳時記曰一日猪二日狗三日猪四日羊
五日牛六日馬の日八日人日六日すて六畜の日とり
七日人日八日穀の日やうし九日の事さあれた
山野れをいすいすい潤を風となり

膳所へゆく人

椒の奈見まよ木よ池田の具
愚考埤雅曰獺取鯉於水盥四方陳之進而弗食也世
謂之祭魚蓋自祭其先

木骨れ情ちやとへぬく真の草
素丸の大全よ木骨のなすけとかまをつけり
愚考木骨のなすけと一糸皮へん木骨のシヤウ
りて了れ雪をけ扱いさかひもあれたよすけ

よてちよもあし

雪のるより存はまの摺活草が

江戸へおるも多を傾りうとたけれは白く

とすくやのたう山家の独活はむすたて

雪間より黄たうりきうるうれは限りし

天神此賛

大威徳ありし梅の二枝

此梅も牛も初音と唱つてし

梅咲や志らくおちく本京を帝

古郷の梅や縁はの二年城

右四句とも定宝天和の依く始の牛も牧童

ケハル十一

の付ふも有ぬへ一次のまゝく後と存京を帝ハ
繪多紙の名目といふ或らく京を帝を帝
と云又比上よかゝるやうくとつふの歌法後ま
ちくしりさ定免るし一もまぬくの傳授
よするん一次に王仁の比く和これを冬
ふとやとと改題した二年あし唱うこのく

ある人のかくまじうを尋ねた
るるたあしりもちよま話て
るるしりあくくしむたすれ
木のこ摺活をまをりみ
るるらきほよ梅さうりく
りまをこうれをむあしり

かほちうとうひらるをか死
おのこよおのかき自りてま
らふとりふをききく

素園云一本は海苔のある庭よてと斗り
たり云をききく

梅公しとくし之を此の醒り井

一書よ云小醒り井は江原醒り井の傍より阿
浄苑を所加持しきり出せりありし梅公
信くしと年之といふ所よををふく
免り井の多れ其まよさくといえぬ
初更しよ小醒り井とくを合たるめさ

秋風々々流の菴をるぬ

梅白しきのや勢成造り
貞享二三井殊風をたつねてく

一書よ云龍門の流ふまよある千載集あり
一書よ云田舎のりてかよへる宿をまよとありに
人も見えぬく

一書よ林和靖の侍をとりむへり

一書よ云筆談よ曰林逋隱居孤山常蓄兩鶴終則
飛入雲宵盤旋久復入篁中連常泛小艇旋西
湖諸寺有客至童子出應明延客用篁簾衆鶴良
久連帰常以鶴飛為驗以故をふまへく洛の
秋風成林和靖よをくへたる因念く今日秋風

々庵子来りて見れた梅も蓋ふ深居のさぬりよをう
たりしはらも彼林連の表ひよやあゝあゝあゝあゝ
勢の足へぬらもーやさのよあゝあゝあゝあゝあゝ
ーやしく與せーやう

梅咲きよるこよるのろーそが

貞享三年の吟句急を照くのちり

むつきのす急清朗の中をま布

ふよあやー真雨のそ布あて

いと心もやゝこよふ依殿の

ふ梅さかつちりりれた

ふ素や足ぬ忘つく表あすれ

愚考は白のそー書をせれよ出せる書何と

三心の人と謂つへー韓駒紅梅詩路入官家百歩
香隔笋初識漢官粧直疑夢到昭陽殿一簇輕
紅洗淡黄なとの侍も足へ侍るされを白梅よハ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

俚歌の或方よて

猿馬古葉を梅ー集ふり

一書子寂蓮法師「おもひよるる古葉もたの
むらむられあるあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

山はもと万歳おそー梅の花

梅折さう梅よまよふ枝のま

は古久昔のあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

貞享四年一の依あゝ是年二月改え有え録

元年山里の句名

一書山云吹徳院水製山作との新端よびるかよ
みよ又存も香をも誰尺ともやさむる筆の
立入りしよと進しゆいへるを時作の扱ひを
妙なり次と

一書よ曰字初接をおて持しよ又そのよと持
おて接よ持あよしたる之く後の句名

愚者阿古久君を貫之の童名を阿古久君とふ
要之ともりよへきを童名をむすひ玉ひし
伊賀の古くしての吟なれと貫之初接して
学問一都へ上りて朝義の功いふし後又位
李将政よ昇進しし後初接へ請てられ

一に知古の附植おし此し梅此枝を人おし
く尺せりれと貫之のあし尺人よ心志
ら守古ゆらふ持むし此香よ句ひりる翁も
阿古久君の心志をむかへ思ひまひ
てかく吟して中年の昔を述懐の意なり

卓袋亭

月待や梅かこけけ小山伏

あふ山かふま

自済かむき休へ梅の蓋が

文
子細尺の尺 涼紙の評あて略す
えたふきをうらふ新なるや梅が

伊賀の山中に雲丹といふ
も此にあらず土底より掘り出
サ新と吹思ふやうにあり

香に白一冊

香に白一冊丹城の梅のふ

北越片所の東より土を切て不してサ新とす越
後の土も平生の土と云ふかたきりあり

梅咲きあり二人の店か形

可人何りみちをくへず

をるの然あり

忘るるなす救世中なる其あのみ

一書よ云新古今「か」受つるりちむり

ちやとぬものさすの梅よふを忘るる

一書よ流きよ又文を忘るるたと記し出す

深川右杉風雨抄の真蹟又もととへり

新書なり一在せよ記しあれりのおり

流しかり

愚考乃ば白も古に伊賀あてえ縁え筆の白

後今冥末よりして夏服の境を控歴する

古々のるりを忘るるふと如く降りあきとふ

もよ吟之すし書かすてすもさへあの中

か梅のふ是よてる一白すへは是形も

送別のも書たり裸白よてま成能せよ

るふとら流の足ても明くのたり

待兼さうり際の時をたすけり

許りの歌

此杯の酒と名付ふものち上
つゝにためてさせぬひ月出度
枝葉の葉物となすれは女いつ
まの山よりせ出さる信玉の里
れ端の庭のかすみぬるや
むらゝを横越して今をふ
入と呼ぶさき人堂上は具又
急を段といへり人すかしの
ぬらゝるまに居て路邊の
低きふ有て願むへの心

世中を横越ぬ

は榎のむの榎の木の木

細代民部の息よあはて

梅の木よちやとり木や梅はさ

七部大漢よま

子供等よ梅おのこせ年の歌

はるも歌亭の情たすへ

防川亭よて

香をさる梅よかき入る朝陽

室を女よま

暖戸の葉のゆり水の梅

室を女よ停架の人園西惟仲の妻おの門人之

よて山の梅とち候し玉へり

乙州梅別

梅差葉すりこの宿のころけ計

七部大鏡よ妻

妻もやいふ久この二月と梅

かそくまぬをたの梅柳

娘の句も妻音一刻價千金漸一日の月の音

又いとむ方ちや一次の句も別と論をいふ

とも万葉よ梅柳すききくをいふ依傑の

うちよ娘ひいふ成まもころよの侍しあ

らむを梅柳さてそめ流りよ女子が

此の古調すれと吹よ出ん屋よを梅柳の序

おのりくれと室よあ守古詩五七言 碧州已

満地柳と梅辛春 謝公自有東山妓 金屏

笑坐如花人 赤色らよおもひ合せて真あり矣

本よさそ忍流せと出せるも水成へい念

を想ふしる詩の念よおのつかう叶よを風物

の清神てたり是等の句を詩の念を一句も

知らんを信しれも唯あやうてもを思ふぬ

やうに又ゆよてお忍流が女かと梅を忍流

折も娘あといふ字よて詩の形容を拵せしる

あめめ(ちや)

人よ又ぬ妻や鏡れうの梅

続猿蓑住解よ妻

何のうし一氣八角すまのりまける
一周忌よ父梅丸の許へ二年い
妻のちとくよしうもまきしぬ
たよりまのほとおもひやると
のたまひ

梅の香よむしは一字あをれん

一書よ六梅の香をまの免りてしるまのりま
のやうに思ひしよまもやも人もちてまのり
昔とりし一字そまもれも妻も人子流か
愚考そまも位のりま指もよ及もれもま
してやへし一凡此句よつてあゆる古詩言

百八十八

の梅よ昔の意をたつめし梅の香よ昔とよみ
うけたる歌一首よ限ふ新古今よ梅の香
よむしをまも妻の月さへぬかけり
神也うつまも此歌をまもて一句よま
もの也此歌よあへては句を解さむるハ
象蝨海の海法をる屋

去来のももへ亡人の妻たもと
いひまも

昔比弱のさしよすこし梅のさ

此句よ二葉の訓くせありまおかくの人ら
れよ味も少しまよる梅のさ玉を破りて
妻のさまへとりまも実ちたる論なり

たし書かなくとも志しんん亡人のそのをいふめれも
凄しとつふ義理も必定せしめて書かなくとも
かしとつふ方に利ありとす此をいへし書かなくとも
大切く既に其角も學の才を違はぬ初書か
とつふ句をまゝても其根もつても才を違はぬ
とけ初書の根も何れと皆もろく難し合へて
亦つりもきたりもあらずも心や其句もろく書けり
緝蠻黄鳥止于丘隅と書かすに於て見し時ち
難しと書かすともあらずしは一句の歌をまゝして
難しと書かすともあらずし其の至極なり
梅の香のつと日の出ふ山路が
七部大淺く委しりれたる暗凡

白氏 九

あちあちや面ししさつさし柳也
學の成 櫻も移るるを 嬌 柳
一書に庄子の物論曰昔者莊周夢為胡蝶栩栩然
胡蝶也其の之よかよつるは恒極の柳の眠るるぬく糸
たれもろく白日も休老も不故蝶の夢とておとひ
よ不登るるを學ると情しきもろく彼故事よりして
故事よつるもろくはとつし依沿の莊子なり
一書に云温叟詩汝曰不比禁中人柳終朝刺得三
眠 一注して云漢苑有柳如人形号曰人柳一日
三起三眠 夫木葉に「三」ししを起し外れ玉柳
ひる方く枝の何をわくらしむ又柳も學の合
と白氏文集に云 綠絲柔弱ふ勝鶯揚柳風蒸

别有情一日三眠何大快蘇家小女共知名此詩よく
叶へりしと云ふも又事なほむふ似たり常を魂又
したるも俳家の法はこ

愚考後撰集より「うつく鹿すの糸よももて玉
柳吹たふふしを其れ山風此方の念ふもむら
玉柳嬉折いつても貴長たより玉を魂と情し
たふやの柳もも依え之又古詩小鳥眠柳借金
糸束の福ふりおちみゆる柳このよ

猿籠と對句

もろしのおろし柳と住すへ
古々の門人たうれたまふ実の吳又をり
杜園をたくり

笠井結一柳 宿る旅出かた
送別と柳とをわさくるるるを和漢の例より
ささあはれしあつた

ちりれよのよささるる柳の志ふひが
ちりれよのよささるる柳の志ふひが
柳のささるる。ささるる柳の論まちく之許六を
ささるる柳と云院伝師と出れささるる柳とせよ
く首切ふ旅とま

愚考もささるる柳と組せむ

楊柳観音の賛

まを柳の哀らむすふ併の那
傘と柳とけ又まを柳が

今付多くの人を傘でおりつけたりと似てゐる
いとあはれなり

八九百をて内ふる柳の那

たゞ免ち炭俵も入次を続様蓑も妻より
し略し

猫乃意電の器はす通ひり

田中

麦飯もやつゝ意の猫は妻

たゞめも延宝元年の次をえ縁の辛和体
たつり

猫は意やむ時圍の脱月

浪化云「板もすゝゝあおちよひらあけ

白川本二

ついで困れひる休へつれなまうりるの歌
猫の意もむすゝたつり

白魚一價あるそそゝゝを

延宝中の儀もそそゝゝ白魚もあつた

薄くすゝゝ白魚もあつた

貞享元年の吟もすゝゝあつた

親子は琴

白魚や思ふ眼をあく法は細

愚考も久其事迹未詳たよ江名も抱ひ
親子をすゝゝてお夕もあつた故ふ人より
親子も我おふても一休和上の意をくひて
所あり一息を一心も物あつたよすて助る意あり

このやきくても白魚の法の細くすくられて
来るの暇をひくくへ
愚考三頼まに山石取本歳禅師值會昌沙汰
遂任鄂州湖道弘後子接久兩岸各樹三板有
過後者打板師乃棄掉迎之因僧辭入嶺師云
雪峯若向爾宏取近日如何但向伊在鄂陽湖
畔將三文錢買得撈波子每日撈蝦撈蜆過時
僧奉前話雪峯云窮鬼子得恁麼快活云
是恙想子和尚ふやあむ

その枕に抱いてすくはるの
くすたは後の方におき
明けのや白魚走らる事一寸

及日記にも又文字雪落しと出せり明不の
と再案なると云々
一説は白魚かきてり千ヨットと訓む人も
あらずこれも鮎の魚かきし鮎有のやに
一ツスムと吟し可なりむあ

鮎別

鮎れ子の白魚おくるふれが
一書は云桑の細尾を思ひまきる鮎ふりて
方を白魚鮎老ふ比一人くを鮎のみまに
たしめふ年四十六え詔二年のまえ
李下芭蕉をおくふ
芭蕉 鮎を先みくむ鮎の二葉が

草木名 柳 梨 栗 桃 李 杜若 烏瓜
 龍膽 蓬 荔枝 束 葦 苔 參 薊 葵
 栲 檟 芍 菜 豆 類 苜 蓿 行 心 條 の 類 卒
 早 或 者 二 十 三 十 の 吳 久 あり 其 余 の 物 類 又
 い ち ち して 四 十 五 十 の 書 方 牧 養 す べ だ
 い ち ち あり 以 予 々 季 寄 吳 名 物 産 物 を 見 て あり
 ら ぶ 心 存 一

甲州郡内と云能て

紫ひある山アも其の流川魚

茅舎に画賛

昔は中へ若葉やさしや彼は家
 若くさや狼通し道たよの野

白丸 古尺

千甲の許にて

海苔汁能く自陰更せり了 浅黄梳

おととへ也 嵩よ 喰 阿 一 海苔の類

一書云増賀上人の禪書一「三つたさく也
 そゝあるア能く老の彼くけの骨又あひし
 りかよ此類の満月を海苔の砂よあはし
 手ゝ 漱し 能 語 の 骨 透 け け け け け 乃
 一車 方 乃 也

愚考 三つたさくは嵩之故能くたるを云
 三つたさくは嵩之故能くたるを云
 老糖

語らるるは佛其をて起の事をして
吉徳の云山家集に序さるるものをおたかむ
るを何そとていひれを略をけして侍るく
と中りるをいふ「たをうくも語をくさ
しとく布の屋敷ふ拾ふとくもたよりあま
ん歌をあたうし生きたをうくもかきかき
うかきと音の二のふけふとくを先
解古生ふも語をうくもいふとくをうれ
乃可く法ふ叶ふと一説すりとて候しあま
ん者、新古今集不教中戒の歌ふ「わつあ
けふの歌ふとくいふとくせうもつかひあ
る歌ふをもとめよ」さ終を一説すりとすも

白八ル 廿五

兼く此歌ふよとてふとくをたつゆ
してまを説了れ笑上たつ夫智度論目
諸善中不教生戒為す

松のふはるか歌ふよとてふとく

此句を巻取しして松の木の獨吟ありし
や、施の守り洋もよみ獨吟うとく今傳
候ことしよ可考

植智のすめてきき松のみとてふ

菴堂橋木子よて

土の松松ふや木原き屋候

は白蝶愛とて花の歌ふ出れと非たると松のふの
句く味くし

梅の雪もくもくかきける。并にけしき折の雪も
その本とさるる。

うつくしきやもちの薫する椽の先

消息来よ云此句も目ころる。又のふりて内所いと
之。

一言云此と許六と本等と云く此書を業一と
ときれ白よて人しよいひめいやう曲とか
合を大夏にす。一。六義といへとも
能得よら篇。序をす。く。歌曲流と心持下
等も。是よりしちよ薫する。曲す。椽の先を
流より白よ。時作と。扱れかけ。赤をせと。見
るへ。一。き。

白丸 二十七

季吟勸進

和歌此吟とよや出雲のハを薫

奈良良よ

妻さうまらや名もたる東山の朝霞

たしめらる天和年中の作。く。出雲のハを薫の
和歌を思ひよせ。く。海も。貞亨二季の白
く。西風のた。中。さ。

大目枝や一。枝引捨。一。書

一書よ山門の流。統一休。禪。一。何。を。書。て。と
新ひ。り。ま。し。紙。を。長。く。つ。り。や。り。東。坂。本。と
引。を。く。く。處。山。上。り。一。等。一。の。字。を。引
ひ。く。と。さ。る。

愚考 吾族とてはたれも憂ふ心 満ちて人 吾族心
ちとちも書くとし 吾族のわくちとて心 坊とて
あやちとて 既とて久し 吾族とて 吾族
又かき受すくして 大空の ぬくちとて 坊とて
こちとて 中へり 吾族とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 吾族とて 坊とて

国正相頼り

をくちとて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて

天和年中の吟

高野山にて

父母の志 歎けし 吾族とて 坊とて
七部 大鏡とて 吾族とて 坊とて

地 以て 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて

一書とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて

吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて
吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて 吾族とて 坊とて

石川北鯤生の舎身山店子
裁つれしをわくさ免むと
さす芥の飯煮させては川を
お事ゝ是そ昔泥坊を能
芥もやあゝむとて代り
ひも今市もよおほゆ
我るの勢喃のきり芥れ飯
天和年中の吟と

笠寺存綱

かけてもやもらぬ窟も妻の雨
一書よ此句を巻取よしては海流の号仙の額
西百年の今も伝ふまゝとてなりとて

愚考今も葉集より一女子の居たふまゝ
と思ひしむもぬ定屋も神をぬまはりな
この付も見ゆ

赤坂の居りて

ふ憎さやかき親されし妻の雨
一書よ雨を家の父母といへた妻のあうみ
一書よかちをみとて子の母は抱れし形
ふりつての吟なり

古原岩は清水

其雨の本下よつてよ下は
たゞるまゝかや降の葉つてよを根の漏
一書よ新古今つてと書のかまのあひ

さば志のさつてふ新のあまの侍より
喜雨や枕くつもあつちのくち
何ま主るとあつちなる氏たりとて
と臨本をす

たふふさ免や芝道をのそんまの
す云 雨や暮吹込ん 川 柳

愚考春雨と五月雨と暮白急の終迄やすきお
なれしと急を以て喜雨 五月雨とおのつ
しつわつとやうに候へしと云ふされしおの
又白急心をつけて思へし五月雨は終ふへき白
急を一つもたうし秋の雨をさし格別淋しみ
を候すもたうれた自知と喜雨は五月雨

つふれぬものなま

枯サヤヤすし海苔の一二す

阿波の庄は新大佛とりよ
あつし此まを十部都東大寺
の聖後系上人の旧跡なり旧友
宗七宗をなと一人二人をさ
そひいとのして彼地より系
仁門薩摩の跡を枯たるま
の庵みかききて松木のいたると
同む礎をこる草のみして
といひらむものふらうま
似らむちるあふ入る蓮華

海獅子水たらしきしきしき
あしつて海にせりし併に志う
へたる空窟ふりてたるの
よんへ休せりし序くしきし
きいすしつてのたうし人の
を山ふえんききし草書乃
かしたしに安置したる城
よあらし人のちのちを
たる上人の法をひりつて
本傳ることもかたうし候も
後ておれもあしむるし
石をふぬつて

夫は又海を言ししに
愚考後系坊重源をえ末源空上人の法を
仁安年中入宋して天台山より阿闍婆を拜し
為教に後治承四年京大寺又上朝延空係
小初して再建せしむ頼朝公奉行たる
そ後空をかくるを

入か、日七系持け名残也

塔山猿窟

陽界のまじりてし川 紙衣が

室の八雲よて

系持ふむすひし
愚考紙衣の着を切ぬきたる陽界のめけるを

又立しる白たを
室の八幡と下野國中又後ありははる傍生
て怪しむるものと信頼頼長の發流事ありえ
まのつたう一獲獲も彼是るおまての吟へ
陽気や柴のそとに昇り
古部大鏡よく

心等のねや夢をすくめて鳴き
あまの夢に別歌たふす

二月吉日是掃の刺髪して

函門ふ入を賀す

初年又狐の刺し天窓のたよ

夢想

柑けきりし二月中旬初花子
延寶七年の事しと我二月中旬獻氏と云
吉沢の侍もある

二月堂通夜

あまのたよもたの傍の香のき

一葉よ云は白あまのや氷の傍れとてその部
入半しるを那たう二月堂よ公書るとして
まよかたよとれはは法と二月報りし七日
あまの日堂茶の花弁よ若狭必達敷大降神
よつて親世をへ献了あま水湧出る則視よけ
て靈符をすれ是を二月堂の水とて

伊勢よ

神垣やおもひもかりん 涅槃縁
一書よ今々集まよ「神」のよのあつとて
と文大すしきおとひもかけぬ 心のまろま
涅槃縁今や鼓自合する 殊教のま
鏡猿の解よまよ

二月十七日 神路山をさるる途
ありの目をまよし増賀

此信 城かちよ
裸よまよし「死」さるるまのまよ

一書よ曰此の増賀の信を懸むといへる 初書有
以上人及心の思ひ深く 伊勢太神まよまよ 龍有
すり名利を捨よとの 尔現をまよしよまよ 小神

白川三行

衣皆を食とてに 股くまて赤裸よく下向
まひりまよと撰集抄よ記す此たより 増賀も
まよ名利をまよしやまよし 二月の嵐がまよし 信を
まよし 此の信をまよし 一書よ
退考 西行の事よまよし 知れまよし 友記すよ及
すり 増賀を橋 桓平の子 意惠 大海のまよて
寛弘元年八月 百寂す
退考 實物集 日本大師明通記等よまよ 僧賀
上人よ書

名所八体 此内
貝まよし 風のまよし 貝まよし 風のまよし 二月二十日
天和年中の吟たよし 貝まよし 風のまよし 二月二十日

其後發波の浦丁より風をりて天皇の法
華令より竟官の魚鬘地よりけ令よりなりとな
むは貝を拾ひて聖霊令の遺蒼たより
舟て太子れ 冥前より備ふとあり二月十九日
天王寺の公人六時堂の前より日私をとりし事を
執りて信貴の浦へ出て一船をりてきて廿二日
太子の聖霊令の曼珠沙華より貝を舟て冥前
巻の四隅より立て、舞樂を奏しとありしその
貝此形様のまゝに似しと云くは風信貴の浦より
吹たふくまゝにして和舟の浦へありしあれとの白
急なり

捨りのよ聖此接核や山を渡

昔つゝやふたつゝ女核より傍

■ 菩提山より

山よりかたりけつりては地を塔

陰尻の尻もすそよりぬ喜の弱

けらちよてしちさと陰尻のま冷を延室中

れ候なり

■ 初瀬より

去る夜や心童く人ゆり堂の隅

愚考やと切てしとと平年より當寸是を神

祇教教の傳よりて猿蓑より其角の根神楽や

鼻息白よりしと捨と目尻なりかゝるるを

傳へんして唯は心童のやよすものおか

たけかきし花次方なり長閑しやしつゝやも
若しよちし辰長閑さやしと急度切つたり初心の
寺堂れそ等の美観を基へもみりてす
の〜ん

ちよ良ふさ

喜風や人を了りつゝ三笠山

六丁のたし。雨や二葉の菘子権

そ等の句し見雪の通りそ子細おー

以讀すし。事。芽滋柳まで

此句等へみりし句たり特例し後て句念をらん

芽滋柳まで行てすし。燕のいちをみりて
と〜ん

群けらして換はくやあふ等 燕

壺つちちかぬす。木るの燕也

盃一 泥ふさるしそ 葵

愚考杜子美の詩し燕蹴花落花落燕燕ろれ
壺もサカモリと洲す盃の中へ泥ふさるしそ茶
碗もも皿鉢ももあ〜んろ〜んて盃の弁有へ〜ん
けもつよさをあ〜ん〜ん又云村と〜ん五羽以上を云
一羽二羽の事〜んあ〜ん〜ん又云村と〜ん
〜ん四つを之朝茶二朝茶をち〜ん又云茶ぬ〜ん
を〜んて村とり〜ん字は大勢の行か〜んを
〜ん〜ん葵の字服又つ屋〜んを〜んつ〜ん
みすをけ〜ん〜んを〜んぬ〜んぬ〜ん

くくよとて又其角を茶の水よををよおとて
可慈そのりよ一よりて白念のすくと手を又く
る

か付子と云くつるのたれ 嵐の菓
茶菓水の勢れつす又菓くよて志のしきつるの
よく物よれをわくくし取合せよへ

近世の時

西と臨川友のや石のけしあき
愚考實文十二年二十九支主人按吟子早世は
仕友を解してませと改東武へ強く時の苗は
れ吟あり

次夜よ葉れ居あるれか
皆葉やかくと又るし葉れ亮
とれすきや句ためあよこやる葉
花子れ焚

君や葉葉や花子のさあつる
唐土の俳諧こころむ 知ふ花葉
愚考史記滑稽傳曰於他滑稽也滑稽如字
音計也以言滑稽滑稽利其知斗疾出故滑稽
望れ花子とて花子の日新也

一本よ花中の花あがしおやう葉れくよ
あよ通れ花あさりのくもやのたよよ
よ新れおかけやとてよとてよ吟あり

飯本亭

ふれ羽の筆彦まゆる寝の巻紙
起しし親友のせむめろ有る

愚考西上人の賦は花依れ人依る無情を
おと深き友よりをよめられき世の起り
と段は先年一暮をとり友より一暮
と解けりしもの依れをとりは襟の白も
うづまれしもの依れをとりは襟の白も
又承友
吟書へてをとりしもの依れをとりは襟の白も

有るふとちりて来ふる葉虫の

一書は云く身一代を形取して葉虫の又方深

と化するものたるよ家も葉虫のこころ方
葉も化するよ月の為よかたむたる
瓜たし一白よあすられし

古池や 榎とむむ水井 音

一書は江戸川六間堀親友を去り
草よ荒れてしる古池は感偶の吟を
靴履完の城に放魚池個蛙争聚と
うしよくかれへ

一書は西行のよさひみて月もや
われしりしむとて榎とむむ水井の
愚考のりし詩をすしめ釋一の説くを
たつて洋新するを我らるるさるれ
一点蛙声

すめれよ小桃とほろやまの餅

愚考元門関曰世尊昔在灵山會上拈花示衆
是時衆皆黙々惟迦葉尊者破顔微笑世尊
云吾有正法眼藏涅槃妙心實相无相微妙
法門不立文字教外别傳付屬摩訶迦葉云
句の意をわおかけなくも釈するすその法味をうけ
つゝ考も迦葉一人ありさるを予もいひのちる仕合
ありてのさる角といひ山嵐雪といひ西風のま
地を以て永く蕉門の業む事や流はたてよろ
大なるそと釋すると一日一麻一米を食して
出苦勞持され一城平とわがる古平ふけられ出
て暖まはる飽きてくらふあゝ忽体たると陸菫

句ハル四一

のちやうふ試を依りあふと尺ゆ乃了我かれ
正風俳諧拈花微笑の句我蕉門は流をくまむ
人と時肝をくまきて信しそむる中一の餅
の事十節録曰昔周幽王淫乱群臣愁苦于時
設河上曲水宴或人作草餅貢幽王王嘗其味
為美也王是餘珍物也可獻宗廟周也大治遂
致太平世は三月三日之宴ふ於て草餅の好
を依りくつ也

おろよ小餅ふそくちぬ桃の花

愚考病に伏て餅を咽一通く餅も桃の花を
水に浸して腹寸そ又飲食の先ふとたりと
尺被りよ小餅ふ水の念味感してあやうなり

任六上人よきよき

ふ衣の伏見の挑れ糸せと

上人を伏見の西山寺の住持方より白の念を万

葉集よ川くろびく白の秋はく入る

六もよ存く世縁の志くく此縁を修く

とらしたちよ

尚白と伏見へり時

唯一束挑み宿かまぬ木幡が

赤衣の白く負亨二年の吟是をえ縁四年

れ冷たき

内裏雛人形天皇は御宇らよ

一本の御宇とかやと出せり延宝中の吟た

白丸四十二

人形と岳仁帝の時野見宿祢は伏見にあり

雛を聖徳太子の時代よきく人形と

雛抱くく四百歳存くと又ゆ

豊守は丹心よかて侍る

く方と人よゆり秋風の

よきよき

よよれ戸も伝ふて代を雛めち

二書よれと三冊のまつりて上巳の節

をりれた紙を高よ人籠の邸唐をかきて

愛あをいよよて以吟あり下略

清水系と流る川の汐干が

まを柳の流よきく一木むが

一書小川庵了の御事をもあつたかゝりひちて
ありつるよりよの夜すもあめつゝもたは流し
し結しとをるま
一書よは夕木の柳ももろく三月三日の白にて
容顔美器の主人汝干よ出て浦邊の泥中
よ折ふまをさるゝ楊柳よ比して若くも
なき柳の泥よさるゝとていひたり
愚考王建の詩此一句集柳條長水面秋詩
秋意移して穴鴉居たををすくつろけを泥
よさるゝとてをそれ條の名きよかたはなま
を又せたるあり

伐株は茅立を又汗を搦らる

右の云くまきりけき木すえとて又へさり
きくもふあつたれより此の意あり

伊賀上野茶師堂の初今よ

たつとらつたかきりけき木すえとて又へさり

愚考よは古のたつとらつたかきりけき木すえとて又へさり

雨のふりりれ

又履の尻おろす山様

愚業するは世説新語補曰謝康樂因父祖
之資生業甚厚奴僕既卑義故門生數百鑿
山浚河功役無已尋山涉嶺必造幽峻巖嶂千
里莫不遍歷蹊常著木履上山則去前齒下山去
其後齒是謝灵運の木履を草履と稱して尻お

乃ちもむと下山の後遺を去のそとては置山
橋の正論を忍へ

世をわづら捨ところなき山 橋

古往よ云違わぬの用一引れ山ありのそち
一さて是をかくすへき及やたえぬるの心を
て橋よあかへ一たる句情ぬくこのちなりと云
愚考新古今よ可さくちる言此山を造る
かする世をのの糾ふと来一かひもあ一此
此情ふく我あゝと云

功成遂名而身退

山は名を捨てちるをく橋あき

愚考そもは元龜を愛する句といへて越王句

踐れ上將軍よりて後、しの討策をきくは
呉王をこ一と退息一生涯を令ふ一 鶴
夷子と称すそ功成名遂て才退くの乃一
合へつと云

水口よて二十年を経て

故人よあふ

命よ川中よ活き。橋小

愚考源氏胡蝶は巻の侍をくは世をよさ
そまかたる言八人かちちとけよとの
させ玉ひてるふら白浪の花籠と橋をさし
壁よと黄令の瓶よ山吹をおさしよよの序
をいのえ一うせよちよきよ布ひをつくさせ玉

へりと言ふ今ふり川とては
二人お對したる今ふり川とては
堞と名を此伊予橋を流たれ今ふり川と名
中さられたる二十年の故人とては中菴芦馬たり
橋より厚風ふらぬを走らば來りて昔今これ
お流あつと云々旧名土芳なり

山橋尾ふくもれ先ふ事なり

一書に延喜式ふ凡忌詞七言内佛稱中子
經稱海鏡一塔稱阿良岐寺稱尾草
尾ふくものとも一の荒王堂をり成屋
ふみおれむのるふり思しと足はるき

白丸四十良

愚考吉野山を金峯山と中て地中皆令の山之
山ふすう橋ありたをよの橋花之殿ふ
山の体たうれ山橋と愛敬一山山を橋の体
ありたふの山と愛敬すをりふを于堂山
山の大悲園るその對を足せたるなるいふ
あつ山のうよて合せて對句なる次を
知下拾芥抄云金峯在和歌野郡日本七高
山之一也慈尊出世其土石可化能金矣文武天皇
大宝年中役小角此峯安置金剛藏王藏王者
過去救迦現在觀音當來彌勒也云々上石能金
ふ化す木くよても急ぬ

心之此うゝかまつけり

乾坤無住

去 野ふらり 極又せりそ捨 空

一書より兼九を信じて捨筆此うゝ一書有云へり云
悪考万葉凡もさるべし此ふて抄れも又せりそ捨筆
と後日記ふ又也

古語云風物今日を捨置いたる仇語の字義
空ふあつて乾坤無住や、と天下に取らつ
真象傑と謂ふべし

嘆ふらん 概此中よりそつ 概

一書云云梅柳桃梅と修しふ云々迅速のこつて
かたゝさふら白中よあつて修て空かつて

欲よみの先達おふし 山さくら

半日此雨よつと 長し系休九

山名ふ二此此障 又り概が

似人なりしや夏の新飯小概ふり

て一巻の二句もさして何も及と一夏の新飯
此白を論法曰士志放道而恥悪衣悪食者未足
與議也云々先人の及ふ志す時悪衣悪食を恥
ふものも共ふたを、また、以て空ふ放す、祖
翁の一及を再興せむとの志よ例の捨よ茶の羽織
きよ粉のむすしを大つはへて概粉とを丁と
身をお意ちりしとて幸此此きりするが如く
されたり概粉此心好書も是食好味なり

ふりく人む代事ふつ流やすしと志免すれ
た里中くのる岩時流れとく及をすりし
必締す。能人一人も何し次在空解しての上ま
いとそれちう

木忠申くに計も難もさくくが
七部大後よ妻

万幸のふ整
くくや休くくをさやんふのち

上醜礪よて
尚ちとりし小僧ちうふらむ山操

未考
甚能あら操よぬくはさく

白丸四十七

一書よ云「たつひの山の色又まじり
上りくさふ志くや心をもて尋すといはれ
夜をぬて仕也」と云捨て秋を月よぬて仕也
たれとも喜を操よ仕也とちう。秋そのをれま
心をつける

愚考山家まよ「かへさふ又さよま
月入る。妹もよるちうさむの意感へ

白空へけ文
う山一浮世の小石山休く

愚考影を今集「あけやうはくさ世のあけ
甚たむむ花めと不我のありすのそり
のさよかよへ

新又心ぬ 女友も出よ 初梅
続猿この猿解ふくを

うらまきり人を初梅の山はらうら
素園云千載集云うらまきり人をさつせ
山はらうらはくろかきとらいのあそびを
あそびを梅ふとらての奥さうく

わびしはや梅のうらまきのや人さ
ふよんきり朝先せと自云 万
いそぎもてんよまき梅う初梅む衣

寛文中の唯一号土著無と早う
先志のや宜竹の尺八ふきの雪
定室中の吟宜竹も尺八れん人そ尺八の雪

百八十四

と花も梅のいと愛したる梅さう

上野より

ふと碎了羽織さて 刀 指女

思つたやふれやや 網や
梅福も出ようきせれ花さる

悪者一白く延室中の吟かえけうを虫篇
又玄友虫と心持る人もあふへ伏襲とかれて
原さうたう三千六會の内子よ屠す故よ羽麻
ともまたたき多るあれたる梅福福もまよと
ふさうれ中へ出よまよれ美虫さうそ此句
句をまよたれ

花さうら 奴も見るや梅さうれの梅

愚考延宝の吟なりつゝして予も新院のちり
居させ玉ひてれ其よ中をみしりるとこのや
司のちりれと乃くつこよるみしりるとこのや
ぬるよふそちりしりく此評製れりつこを
斃ちりぬ花を死とれて産したるしりと云
ふたれて日作しつへア外に子るのちをよ
ふとよけ白よち叶てるれと知るへ

憂方知酒聖

貧始覺錢神

花よ酒よ赤酒白く食玉

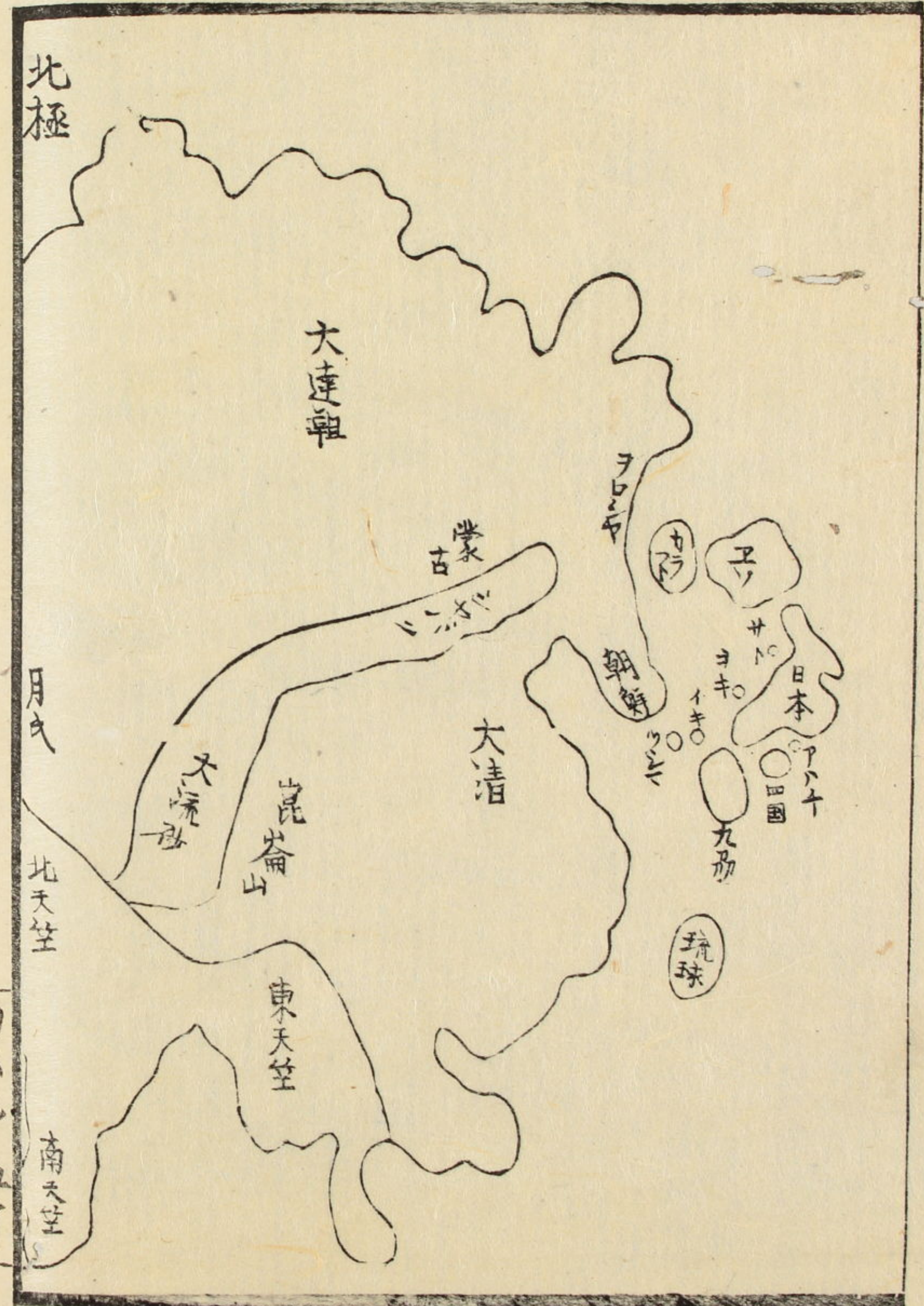
愚考

酒れをを聖といひしりつへのおちす聖れ

夫之則貪弱得之則富昌無翼而飛無足而走
解嚴毅之顏剛難癸之口錢多者必先火者
慶後錢之所祐吉無不利下略此句天和二年
の吟なり円棧活法又美者曰醕紅者曰醕綠者
曰醕白者曰醕是下酒之飯白く酒濃くはあ
らてア、波せち此酒白く飯玉しと忠ひの介
を白と云しやへり

阿茶院も此よ来よりつるよ鞠

一書よふさあをつむといひしり山何れ使ひる来
しりつるよ鞠し詞を括てをさむしは了来り此の
おのりれを花よよそて日本の威風句中よ花ちり



百八十五

愚考も解す不も、鶴三夫物此海の詞成へ一先白
を解むよ、そまを委、く、て人をて、みち
ひくへ、頼政家集よ、い、さ、の、え、つ、け、い、い、ひ
一山、甲、れ、使、も、ま、さ、ら、よ、よ、ま、鶴、あ、け、此、海、を、海
此、文、句、よ、の、り、用、ひ、さ、ら、り、あ、阿、葉、院、を、西、北
方、歐、羅、巴、北、申、酉、の、海、名、よ、あ、る、あ、ら、て、日、中、よ、り
海、上、一、万、二、千、又、百、里、と、云、く、唐、玄、天、竺、よ、り、よ、り
及、ち、凡、阿、葉、院、ま、て、我、日、の、本、へ、來、船、す、と、と
り、ま、之、詞、を、中、分、を、特、く、て、台、名、を、日、本、を
自、稱、す、。、此、時、此、の、名、を、稱、よ、あ、ら、り、て、日、本、
と、稱、さ、ら、る、た、ら、う、阿、葉、院、と、い、ひ、ま、た、力、字、よ、り、
了、國、皆、も、て、あ、ら、れ、る、た、ら、う、未、女、く、ま、た、よ、り、圖

三ノハル 五十一

再論秘説何の本れ、よ、と、と、志、ら、れ、白、ひ、が、此、
此、花、を、若、木、れ、花、よ、て、傳、別、日、の、神、此、か、く、
詞、よ、て、日、を、字、と、く、を、依、り、ま、へ、り、さ、れ、を、脇、よ、
一、あ、ら、ふ、お、り、を、よ、く、む、事、
そ、み、て、あ、ら、へ、く、又、海、北、北、も、海、の、喜、ま、日、の、ま、り
か、り、あ、ら、い、つ、よ、よ、と、義、一、を、ら、れ、此、其、日、の、春
を、つ、く、花、雪、花、葉、賞、歌、を、り、稱、を、る、花、と、り、ま、
さ、か、い、押、て、あ、ら、る、る、唯、ふ、を、稱、よ、あ、ら、り、と
り、よ、よ、て、思、ひ、た、の、る、く、一、れ、稱、れ、歌、よ、て、花、を、
す、れ、と、い、ひ、れ、歌、よ、て、稱、を、せ、ら、と、い、ふ、を、よ、く
と、く、考、よ、る、

いへりしと

愚考も余の銘をいひつけし一書り白毫茶あり
あつた越後米山峠ふみ絶無茶は休み一雨まで
素湯煎沸し一と婦人より是を無茶は白茶
といふ此白毫素湯は花の香けかつてく
ちよびおまゝ一祝の白茶と素湯をかき
たぐる白たまり

瓶中庵子膝を入る旅の

おもひ寝安かたしけれ

ふを宿にてもめ終りも二十日程

抱儀云酒も集よ一嘆しよりちりまを
さて又一福に茶のともよて二十日程よりけ付之

白丸五十四

玉ナむいりかひて精をぬき杖より行
付り成書よ家無亭と瑞書ありいつて
あつむさしはたつたつて一とれえさか
たり半る白よも一いつてより可なり

よ一れよ

花盛山と日頃の歌けけ

愚考もその吉野山は絶景と七部大鏡と云通り
いへむのちよき名山とていへむ
とて敷て景を誇れむちりたるとして足
ふれとつてすまゝいつての通りけり
貴殿陸一の名白く試は候人をいへむ
并替は腰をかきつて女は素衣を履けり

酒のつよふらむかゝる紙のむ
愚考いつれも定ぬのこゝ一帯をあたへち
降くむく一帯をあたへて降らむとす女は
物語の雅通ぬ長「何を」を「何を」を「何を」
いの山はくく「何を」を「何を」を「何を」
兼少將退「何を」を「何を」を「何を」
風ふちく「何を」を「何を」を「何を」
を後の方やや「何を」を「何を」

路草一草

身衣れぬるもをむ雨のむ
愚考そと私取の詞を「何を」を「何を」
おらむれ七文字も私おれ上りて「何を」を「何を」

白丸

として「何を」を「何を」を「何を」
くく「何を」を「何を」を「何を」
も兼山のけれ下もみちぬるもを「何を」
か「何を」を「何を」を「何を」
換骨「何を」を「何を」を「何を」
了たるもれなす

酒居堂記

山を舞ゆ「何を」を「何を」
水も動て情をなくさむ静動
二「何を」を「何を」を「何を」
了渡田氏珠碩とい「何を」を「何を」
佳境をそ「何を」を「何を」

一 酒をすすりてあはれをあら
 二 ふらふらと酒をすすりてあはれをあら
 三 かきくちの門を入るとちゆ
 四 さけとかりて彼宗鑑の定まり
 五 おしりてされうふ一等くた
 六 へくおう一且それ簡う
 七 方丈なるもの二間休紹三子
 八 此院を次く志うその乃うとを
 九 ろん木を指すをたうとる
 十 かつのたをうけとち守柳お
 十一 もり浦と幾田幸徳を右左の
 十二 神のとくしては成抱る

一 上山よむくし海と昆池か
 二 ちよみい松れ雲波を走ふ
 三 地敷の山に良砂る松を斜小
 四 天さる喜羽石山肩のあふ
 五 なむさる毛等山れ水を懸ふ
 六 かけして浸山を川をよる
 七 法靴遠泳の日くよかを
 八 うこと心通能風やもす
 九 十

四 言よふふふ入る鳴の海
 愚考山を移りて世を也一たきひ水を
 膝をさるむとを思ふも

文考の階級へ下るを送る

けあろ推せよふりー 又巻一具

一書よ云用し雨や交々まよ秋早て中よくてふ志志き
せむれあみして既既と食の旅はよ巻戎の一角とえ一
一書よ此能引おたきりて向上の文藝友初葉れ耳よ
あふさひーみ忘るるまとの示戒を了花の故を世の人
心しうきまかちよ思ひしよさるる奈も出来ては巻の
令根をよきよおたきりそ志志一具の又巻よかきりー
てせ涯とあやつる巻かきりとたきり

種せやふみ出りよ巻あふり

一書よ口む盛れ現在よりま束の満月をおし

て種ササれけ合余情海

せよまきり

何の木の花とまきりす句ひが

古はふ西上人何とれおさるるはのまきり

福とまきりけまきりまきりまきりまきり

一見を許みまきり

うまきりまきりまきり

一書よ云一見の景をおく付まきりまきり

後れむまきり別彼のまきりまきりまきり

又の和えりて神徳の有りまきりまきり

まきりまきりまきりまきりまきり

まきりまきりまきりまきり

伊加美此ふ花垣の庄を待昔
ふるうのいま梅れ料と附ら
うといひ了へ付れた

一守まこふふやれ子孫のや

七部大終よ委

尾張の門人より清海一栲木
吾れ独活茶一栲婦くを

人くよひろむとして

飲明言花けりせむ二弁栲

いり山ふ今守

ふ此陰視りかたる 丸 尾

日ふよく終てさひーやのり栲

るハル六十

あー山りて

む山二丁の本流を大悲園

愚考出山の栲も、飛山亭の時時を野りて

うらー地玉へる名ふくは白け急を山よ尋常

の山ちよこも名花の種をうらー 植たる原

み花のうらーてふを疑ふまこも 伝可し

ふりよー此山を山あ名山たうれたいふた

栲を植ても土圃の上ふ放ら旅名むよなふ

室よ旅てを野れ白も山栲と山を立よ伝

たーく和ふの大悲園を結ひ入る伝も茶の

栲れ白の解みてー合せてそ對白のぬし此

意味をまひー

洛通の陸奥へ行く時

予枕をふくむのふりてて来たよ

愚考了らむとのふりてて心裏の花よりて智慧
此なく三教をまよふ決定審理謂之智造に
分別謂之惠華者円覚經に華發明喫十
方刹疏見心既明即惠光開奈觸白魚染故曰
心華云々心裏のふりてて心華云々月花云々
あつてたゞ一此月花云々心華云々かく種と志
原云々又一葉ありて元来洛通を食ふく洛通伏
たす云々を祖翁川上云々能得此の仕玉へり
たや歴々此能得此云々了て人並の交りては来
而下る云々了て人並の交りては来云々

むい無きふりて祖翁の首凌はたふりて木茎の
根を足てあつて

むい無きふりて祖翁の首凌はたふりて木茎の
根を足てあつて

愚考了らむとのふりてて心裏の花よりて智慧
此なく三教をまよふ決定審理謂之智造に
分別謂之惠華者円覚經に華發明喫十
方刹疏見心既明即惠光開奈觸白魚染故曰
心華云々心裏のふりてて心華云々月花云々
あつてたゞ一此月花云々心華云々かく種と志
原云々又一葉ありて元来洛通を食ふく洛通伏
たす云々を祖翁川上云々能得此の仕玉へり
たや歴々此能得此云々了て人並の交りては来
而下る云々了て人並の交りては来云々

孤石摩柔へゆくを送りて

むく起し隣れふの白ひらな

西行上人の賛

捨ててくちをちきもれとおもへとも

雪の降りてさふくさそ阿婆ふのふ

月もこの世古すすれ

一書し西上人の命をそ候、女舟て有れ候をるもす

あつて

傍き吟然ふの辞

杖取ふ草鞋をそとて笠の田上

名をあくそれえ縁六とせ証せ

け和傍き吟武臣の東海川 さま

麻を冠て既ふ一歩を始むとかく

此傍きふ風情をぬく市をさ

けりて身し斗着はゆ舞の身と

方々へ今年すといせ無路二語

むとれ方と雨ふれ勢ふ等

く流は宿をそ見千尋の島上

如を振ふと路ふ伏所も角

む胸中此草いさたより予存

の交りてをたれり久し今比

別ふれ多ふく候ふ山峰上

立て相根山遠ふ又や候吟

雪のくたぬる雨くそ縁勢此

嶮巖のくまきつてさへれ
見かたうす首越めくせく
見よあやうし此岸上ふむと
云く杖を分ちぬ

鶯の毛比思き衣や花 乃く
抱後云鶯の毛を織込く夜方
赤壁賦上適有孤鶴横江東来翅車輪玄裳
編衣夏長鳴き

露沾公して
あはれの花もあはれむ花 あり
一書云云露沾公と内卷下野也
の地を

又万石を領り祖家と文遊を此度六方を
吉野山と比して西の柳水一層の流も有りと
中庵

親喜此夢見又やつふ花
花の中を踏む上野中

古語云其角云流と上野は夢に對して
一聯二句の格なり句を以て句と
去來文云上野は夢の句を流隔空云云
到の念たる

夏者一聯二句此格と賞美相の都府様
有瓦色親音寺只聽鐘あり瓦の色は白
夏三年の句なり

肅山の画ありて探雲の画

琴の絵

ちる茶や多しおとく琴の音

古往又云深氏若菜の巻よるとして詞を用ひし所
句ありてへーき

一書よ云そを樂畧の画の賛に劉向別録曰魯有
善歌者一虞公發声拂袖梁上塵此心よかよへてかの
梁上の茶をさるるをいひかへたる沈潜のまづ
や尤千練と稱すへー

一書よ云史記晋平公曰寡人所好者音也願聞之師
曠不得止援琴而鼓之一奏有玄鶴二八集于廊
口再奏之延頸而鳴舒羽異而舞句云と琴の画

百山六十五

賛よと云は琴や流人のほりむきむくは法よ
梁上け茶をさるる拂ひ法類よと云る色を感せし
めりむと琴の徳を稱せしを了
或人の云伴縁の松山とて某のちぬと傳へし之幅背の軸
あり此句を中よりて

右を鼓

ちる海やを鼓ゆるみく其れを素堂

申 琴

ちる茶や多しおとく琴の音 芭蕉

右等 逐鳳凰

けーかぬぬ桐の葉茶やをけり 其角
愚考若菜の巻の詞とて深氏よ伴都みく琴

をたててゐてそなたはひらあそくしてお
ちううと山のきもおとろくーはくむとせちふ
きかえふへたとき

既ニ章孝標々句ニ梅花草雪花琴上云々彼是
み合されておわー

玄席子う海川の音を記す

おんみよとさる舟遊ー柳示

一書云戴安乃とて人の名をんむとて海客を
細へふ舟掉さー友人の名へ傳はるるた殿ー
お明たすふと木の香を了そんむとんひまぬ
明ぬれともたしや奥たうー友を可ふよー
ちうーとて留アーるとば急をふよひちるる

多岐たよ

橋をふと森とくろふせぬそ

むよ森ぬまはるのあろよ

花よ森ぬまはるたたくひは嵐の雲

一書よ美は望れきよいかたうれたて花よ木つよ
うくおんの中うをうして移るるをせぬ
愚考系よ森ぬまの心よーてし海へ心をま
れまの心よと書まーと別うくひすめか
詞まよと嵐のふよ森とと森ぬとてよきよま
あー後森んふと引うけてあすのうちう
と持守るすもをそも森ぬたたくひうと奥
たうそのまよとお強の詞を句よとせんおて

洞書少くも白をさしきりては花なり
上りて花又よるのやうに
人し幕うちたけきもめ
音小唄のさるるしちよ
ににかにさるるれ松かけ
このやうに

四つ又いぢれ 探さぬ花又心哉
七勢大鏡山妻

苔は水より

凍らけて雪に汲ほん清みぞ

一書し西上人「濁くもよやましくむしを
一書し山井みぬ清み汲ほん

とくちよすすまみぞ

愚考此のえま生所あり田横洛法は日筆
倒三江水の句よとつま玉ひて苔は清みぞ
汲ほんとちすく働まよる清みぞ

海辺の形

葉細く花又顔たる山花か

一書し西行上人「すすけしあつるあつる田よるを
了らすれたさるれ顔もさるる陸の意之
愚考花又顔とくれ顔とよるも似てはるの
急葉細たれとく花又の句よつて其花をさるよ
あつる下帯の比喩なすせよあつるもろひさ
休えと彼の不意のむえとつかれ歩むを小

百姓の身も業細の飯を耕し一漱休めよ
腰うちよりくやめて此業程を十かゝる入る
たふとふ出やのよきせしむりかたのくふ
亦休らば作をかくも依りむあり七部
大鏡の炭徳をまれば宵の柳袴のほど川合せ
尺へ

大津へ出ふる乃の山路を越て

山路来り何やゆの董山

たふとふ何とくちりあこ又文字あつこ
山路来ても再業あり「相松山より越来れを
つはすりしれ二」本三」かたれそめりむ
濠念右大臣此方の之よ叶へり

悼呂丸

尚陽よあすれ多塚の董 中

一書よ云々意翁句解之有れ孟進り詩小藤非世亦
土孫子莫送春香入客衣藤非世の一名當屏又
楚辭九歌曰悲莫悲兮生前離此句れ心を精
一たふとふして當山歸る一手のふれ秘悲憂
別れらたよりれよけ死別と史よつて心程と衣く
とつとふとふり董山塚碑の思きと思る一手心を
持せしむる新古今一石よふとふり一人を大
つ稱むとあれしむる君よすりれつそり
一書よ云代よ久く柱ひくむらへ遠志を送れ
了遠くよと思ふとつと心たふと返りてよ當屏

を送るもその由も知るべしとの意を以て嫁に董
と申し嘆息するも其れあらず其れを以て心よて遠き
よつし其れも知るべしと又へし

一書よ云姜維諸葛亮得母書令求當歸維
但有遠志不在當歸同くも此詩を出入り
る事なき事由を董に一物して感情を原くを
人を憐らむといふへし

愚考源盛親記曰姜維蜀人屬して母を別るを
妻もつての書に思ふ姜維はかくも當歸と
いふ事を知るも其れを以てなき事なき事
を以てし姜維返事よ云良田百頃不斗一畝但有
遠志無有當歸忠義の爲る遠志の爲る也

白八九六十九

すといふ

白急を姜維々遠きよあてて當歸の心を
いふもなき事あり其れを以て其れを以て其れを
董のけしきを知るも其れを以て其れを以て其れを
いふもなき事あり

旅店即興

躑躅泣くもけしき千鶴裂女

一本よけしきの書にせしめて出候を大なる
あやふしきなり

一人尼其家すけをうし白マ
峯入や一里おくる小山 伏
又へたるも其れを以て其れを以て其れを以て

山吹の意茶のふれか志ち歌なる也
 一書ふ云庭室中の句ありてふれ色のふりさるる
 とつしをりぬちちる山吹の色はけあされるる茶の
 心をかこち舞ふいひたりきるる能治の一與く
 山吹や字治の煖炉けみあふ時
 一書ふ云け白ら画賛の一章ありて山吹は字
 治の龜合茶の名は使ふといとわたりて今集
 ふ「今もかも咲白くむたちをさるるふ志は
 うさす山ふきのふかる風情を思ひよせし
 流たり
 吉野西河もく
 不ろしと山吹らるる清の音

白ハル七十

續猿ふれは解し垂し
 山吹和筆ふさすへき枝の形
 二、字あり
 菽椀門と菽椀わのたすか
 菽今々の画賛
 菽椀はへる茶屋さしや能き茶
 又へたるまほさしとく子細あり
 畠うりり言やあしらの椀麻
 一書ふ歌畠あり椀麻のひくしありし
 うたさるるを述り行ふ
 陸麻の志ありて其の約
 愚考陸麻の事と椀の子ありし出るふ二乃

山を隆尻のまゝくみりて比叟の山を二十丈と
かさの上へ木と方よりまゝ隆尻の境まぢ
くみりて空をかくしいつれも掃戸端
此形と之ゆきれを隆尻の尻も居り守と動き
おきよ句候せし終り

暮返す四ッ火をさるり紙至履

田かよ妻の言を聞き

入おれ隣も聞えん妻れ言
か川の妻のまかり隠さく
隣つら勢見ま何なきの妻のく終
一書し山休との妻れ言きて足終え入おの

白ハル七十一

隣よふやちくむ此心を許しあぢあき
里をむちく終りて足り隣りありく
足る妻の言を聞き
再渡妻の言を聞き全体夕暮よまあぢ言妻
終りて妻の言を聞き終りて右の二句
くも夕暮のくみ候てまゝ一句の体よま
今

大和紙紙は今井様井を

色き丹波市とくやしふ

くそ日の言かすまらに左の

足未たり候たをえり

茶外く候かすは右の

守湖の情

引真を近所の人となりみりる

二句ともた七部大後子くすし

千位より母よと上りよ

前逢三千のおもひ船

ふらりしわのちやま

歎別の細をそく

引真や多る魚れ目もなき

一書よ云え深二年矣れ細る苗の句あり

誦よるもの魚に比しみるるを

くふれの上ふと減るされ

一書よ曰杜甫春望の詩は感時花濺淚恨別

鳥敬鳥心又文選又王籍懷河岫晨風思北林又

古樂府又枯魚過河泣何時還復入を等在

張向の句あり

愚考を解す知三別あり一白を注す

れ入布のたが孔子家語曰鳥魚生於陸

而屬於陽故皆卵生魚遊於水鳥遊於雲

又東坡の詩は三年飲泉水魚亦相親を

魚名三年の親みすあるに況や祖翁を

東都は十年を免られし師を離別の

情今眼をうかひる及ぬ世の交情は涙

をもくはしめて時を省み居てる在ま

我とおもひやうたを

仍妻と和なれ浦まで追付て
一書云曰千載集と崇徳院御製可化と根小
をるる古集よかつるちうり妻也とるり
いつてあつらむは云を精一たふ一海を
和歌の浦と山色遠舎空海明光見日の
眺^言岸よりして玉体色の瑞籬はく妻を
とてむへまの地ちあつたれた追付てまの
をちののののて浦山の風とみ光をもし
せし不意あはとりしとて
愚考妻と在方より来りて色となく故に
東君とるとの異名あて其は浦の方して
色系一追付てあつた三日月の極境

句七十一

たつて明^れれと夜とさう方よと来りての意味
哉思惟して妻をふくまうて夜を追つたの
従^て追つて南^の浦^の和^の語^をま^く未^だ
お浦とて追付あつたあつた人の物もひ
うかさる浦^の和^の語^をあつて歎す

○ 追考

上 磯 礪

あつたといふ小傍をうすむ山橋
は白の磯書よりしてあつたといふ山橋と

いひあはせよる知あるへき白なるをありて
不主考のよしをせし或日抱依氏画今より
引きて中庵より立よるその日のを画なりとして
松下にきき子を写して持て来しを今も家
寸馬不を展覧すよ老松緑を今も
丹をききしをききしをききしをききしを
尔とてあいてはありてありてありてありて
一尺とてありてありてありてありてありて
侍心よりありてありてありてありてありて
白きし深きしをききしをききしをききしを
採茶去只在山中雲深不知處 上醍醐の作
かり下醍醐より上醍醐と三十七丁多山橋

白ハハ五十九

けふ論と明くありて 扱當りしと山寺入の當
りしとありてありてありてありてありてありて
らひ赤休らしの振也ありてありてありてありて
々々一様深雪山醍醐寺をききしをききしを
發道なり 堂山の派ありてありてありてありて
とつと之論のなかより 賢聖義をききしを
此師より始り 初東大寺に深路ありてありてありて
聖堂法よりありてありてありてありてありて
みかち屈せし鬼蛇不よりありてありてありてありて
に書を讀む侍る茶盞を並べて昏睡し
侍る夜半大蛇祭の石より下るる教義
申す又切則作向く此寸蛇たちよりありてありて

又金峯山此後組役行者の後... 行路
たつた... 在葛葛藟を踏... 入峯せ...
よ... 苦行此者不絶峯入すと貞観年中
醍醐寺を... 顯密此二教を... 余
叶丹波救峯す... 定基九
年七月六日逝す年七十八と云く

一日伴公石入束して云おもはれ浦の... 日車は
道名必思會を尺合す... 宗家父の解と
とを遠へ... 大切の... 人より...
多... 云く
愚考は... 論... に及... 改... ありまし

白丸七十五

を記せ... 兼忽... 人... 名所... 今...
尺... 一... 杜... の... 在... 中... さ... 平... 解... 殆
之下... 方... 登... ら... れ... た... 人... 此... よ... く... 網... 舟... 舟
る... 舟... 此... 解... へ... お... も... け... 文... 字... を... 供... 濟... 法... 眼
温... 飯... 此... 書... 方... あり... 結... 小... 眼... 所... 兼... 上... あり...
と... 今... 伴... お... け... 小... 眼... 所... あり... 必... 定... あり... する
陪... 膳... 陪... も... 玉... 篇... 云... 歩... 回... 切... 随... あり... 加... たり... 助
あり... 益... あり... 家... 長... あり... 陪... 長... あり... 白... 丸... あり
陪... 膳... 又... 給... 仕... 人... あり... 又... 山... 王... の... 侍... 膳... 所... よ... く
今... お... も... け... 浦... 字... 義... と... 白... 丸... 義... 眼... と... 白... 丸... 文
体... と... 白... 丸... 又... 心... 人... 達... 心... を... あり... 改... へ...
東海道名所図會 卷一

東海道名所図會 卷一

よて椿を折つてそとする是君の代の威光を
すしむる

けし買む葎の宿の難妻 梳

ふよ似ぬ本や膠馬き梅 根 性

江のふにまゝ魚ふほく梅は必

敷四つる梅よまを引ゆるも年

併雪を白糸とちりけ柳のそ

もちゆきちちりけしとまゆり氣のある大

雪さうろち大雪をよ平雪ともいふ我は徳

とてを御雪といふもおのきさむく千解雪

北柳よふりかふるやいたる春の陽さすやく

中江流る流るを柳の家とハいさるえと

白雪 七十一

さうとつふ是古洞のあいのをまこ

美此日をまこし柳の尾 長を

是もまこ古洞のくせとて柳のたふやうよまこ

平をまこ尾よえまて尾をまこハたかみ

雪流に後まつてやぬきか南

美れや一ちうつたれ 三 山

まゝんやませくくまて 如 以 後

まゝんやま太ふみつて 猫 の 恋

此又文章あや一美やまゝと猫の事の覚え

もるれかりあゝくさすま

葉はふよ成て葉は 妹この妻

葉はふき徳あててさる 踏 此 妻

見しやう右洞窟を以て其と云ふかけりてその
いふきと家家のさやを思ひるまじり

画次

那々山の中一木折らば
さう雨ややうさうさうさうさうさう
ま雨やちりちりさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
門人の對け
梅禮も一歩つては回打か那
さうさうさうさうさうさうさう
圃角ら箱の焚きやうさう
その整もさうさうさうさうさう

白書八

愚考若名中の女児よと母てよ心さうさう
その娘さうさうさうさうさうさう
いれさう

乳母の事
乳母の事に依すかたて乳の事

それつらぬところをさうさうさう
花を娘は目ありさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
蒲の葉や落もさうさうさう
古寺の槐さうさうさう
さうさうさうさうさう
愚考林一はさうさうさう

是よりかきしり籙の洞書ありへきりく

甲斐猿橋

あつてく日れすふ谷やとふふ

愚考もつてやめりくく古今三をりれ傳よてむつじ
一説に猿も馬も先を定かきしりてく用ら白よ
猿さしは程こしてあげとふこをさむつかりし
人よえく三心助はいてつてつてふふハ別猿之
おきしりて

此以人のつふをきげをきつて然の得ありて

猿さしや猿も居る。かきり北上

親父の白だきしりてさし不富ありき。癖の白よ
かけたりや福も石さる。さめりく

ハハルハ十三

といふいたりに池橋ありむおれ白をきり
つてつてきりかきしりは是れ非我をきり

迹よりや核さしりて外に

臣考迹ありぬれありは武苑の曠野其
の末文かけてるの紫赤れ地まは儂さきて白くと
あれはとくく見ゆるその中よいつて見るとさ
又外のさしりそのことく見ゆるをさしりふとさ
まは赤赤に「吾業」はありといふる。迹あり
ふけかくきてて世をすしりかなきは白いけは
をいふるよてさ方くた洞のつてなれを併の突
はけありよててちり核のたのててはを迹
と與一たる事よて此名新よて核あり

かゝる際々々高義を傳へ換へしごと
朝鮮人の浮瑠瑠の文句おちよう下り
あまやうあけをすまうしといふ事ありて
織物の撰換たうりも海防の密平より
其織物をををれを徳屋の形の上り
梅の木を織ひしごとく嵐雪り徳屋乃
形を去りしごとく通うりよて藩のけむを
撰とむくりしごとく

思思評しちせしりまやしりあまやしり
閑らあれをとりて思本意は兵人存心ハ
一向り解しや守但し思本意はうその
織物をををりしごとく思本意はうその

むちりれれち皇帝比下かき

思考此皇帝ハさうさ白皇帝之を皇帝の
りしりしあし中よふちりれり揚貴妃たり皇
帝ハ人れよの心をもつてふゆふふその
に志ありしごとく思本意はうその
後して半死を馬塊ら系に害しきりむきハ
自在の才よて害よあふしりしごとく思本意ハ
ゆり安んぢり白皇帝頻り此よあしかき候
をきして半死よふゆふて白皇帝のりしごとく
ひしりしよ思本意はうその思本意はうその
をひりしりし半死り云天よあしを思本意ハ
まあしを連ねの枝し思本意はうその思本意ハ

たれをこそ見せしめてちう年おへりて朽
く腐ふも耳にふまきくとも流るるも
一説敷盤に付もちも川うとくも少く求め
きくも能くせしむ

待て消て花の香と持て文へかよ
柳を云え流るる水撰歌曲よ又くも水と白
右側をわきま

花のとも葉 葉をわめて交まらり
めくくくと流るる後の流りて水は自然なまを
是よなりて流るるをわめてくさきりとし
俗流たり
まぢりり ちうちうきさへ ちまひ

台ハル 八十六

月よむし中ふふ風もたはやく
そのくちを野へ今よまよまよを風はけり
とさちむ古湖く

之被勝もわれちるふのよ
大出もわよ 花もむれ 果

世よさかたる花も 念佛ナリ
まよぬぬふのありか花もま

是考大信正慈念いつるも此こさけ
たつぬともふも法ははかりあそ又法花經
方候品よ八草木國土悉皆成候の心よ念やて
いふはるときは自然と此の如く知ぬ

う是等の人をあてやうす福津と稱す未詳
付三日月不台他比台も表に志さうふ書雪句論
をもみちの他を報と名へし是秋句よせむとす
秋比臺を加へてす是法人大鏡よみ解しをぬ
まともあすま一故考すすを心知葉ハ表すを
あしはらとするへる

宗澄守或貞徳ハ以て彼の天正を

うけけて心匠を乃軍と付ふ此法

よあそをむりの流う御ををあふ

さう書

月花ははとやるあとのあし一達

風考袖日記ニ此句を三聖人の想としておはる

与ハルハ十八

そは後回以此癡業之云々人上對して月日
あし一達といふもやあし自らをもて流る
ハおこかすしりれとも之聖人の想として其酒のな
まはるを月日味とやりせぬかかともあしをよ
たはるさかすし一もかまひも志らうし月日
こも達とともれ務の流るあし一儒仁老上對して
流るうけ引ものあしむかあしう袖日記といふ業
ハおこかす杜撰とともありて用ゆるま書す
宗澄と志那弥之旨といふ一能書して一流を記
一能流をまのうて山崎上隠述して世の勝又
よ流る人をもて能流れ元祖といふ新文の流
杜撰の句下に妻しく解すへ

守武々侍勢山田比長官にて宗鑑と云ふの言
 名世の幼く宗鑑より大抵彼守武より千石あり
 貞徳の松永共安三年秋八月近衛龍山と云ふ系
 政山より細川玄直法不法眼細巴法橋宗鑑
 等より作はし誅藩一道の宗匠免許ありて能治
 此式自を以て御筆と稱はし是則俳式根元の
 三巻證之門人より之を重訂 貞室 梅盛 雲
 季吟 令徳 以上貞門の七傑と稱して京都に在
 行はれ又玄札 徳元 未得 加友 卜 娘 以上五松堂
 稱して京都より行はれ其甚富の則 季吟の門人
 一して長門の流あり 若織 宏文 竟 正
 風一流の祖原と云ふ成玉へりむ屋なるかな

白ハルハ十九

詠言は是雜腔長く随へる
 是考是を春句と心付て句集より出さるる
 注釈を加ふるの如くひ大キト非なり
 是ハ信徳七百五十韻の次款より八百韻目の
 三の表の句に既よ七百五十負の語あり
 ニウ換投を以てても付しむ心する
 三ウ 詠言の是雜腔長く随へる
 遠句以て 莊 子 可 見 矣
 桃 青
 其 角
 才 磨
 是を春句より見し所を解し季より寺に
 禪骨是附句の體授す考ふなり

酒吞みそふ人の画よ

月花もさくそ酒のむ摺の那

色蕉庵と火の為よ彼おて

阿系人の許は春をわむらるよ

朝の梅子雪の雫かろをえろ

汝川の松もさくらむ 吾々の梅

なふとせねらつおふかろむの侍も

公川の春の末さる 蕨はくら

此白葵の畑ちちらえり

此一やむや墨子芥焼をえり

丁癸云蒙末曰淮南子曰揚子見達路而哭之為

其可以南可以北黑子見練絲而泣之為其可以

黄^ニ可^カ以^カ黒^ス此^ニ付^キを^トら^シと^シて^見る^事

愚考杜律は盤剥白鴉谷口栗飯煮音泥坊底

芥一は白鴉音は藍田縣東よあつて音泥

坊は縣南よあつたかの孫つて糸の黄は漆は

墨は漆はむらやをあつてけく其意をとめて

芥の飯は色も出のえかもるるもなまは

芥焼はしては紫のまきも根のふきも

けの黒きよは煮漆はして俱は糸かもるる

めつちねはまきむらやをかきむらやの

りみちねはまきむらや墨子。と初る人の芥

焼はして見てもおと二切は吟せすむら

自化のわりちりひひ七ふよ吟せすむら

墨子々自分其體をくを他より燃しむ
やうにゆゆさう

好くや名もなきまよとくまの條

相園寺より

学より感あるやれをや一し

五秀相承寺を祥宗五山の寺二より一に安基ハ
管窓園師二世妙葩足利義満公が遠をさう
寺領千六百六十石を志くふに應永元年に
焼亡より天文二十年秋三好長慶放火よふを
四度よりふ塔頭普光院の竹林に定守が郷の墓
所を此定守に代を横を代に感あるを考くありし
さしを遠仁より大はさるる所を論は社

乃ハル九十一

世中人不ふも智三十一

三国語林曰楊脩字德為丞相曹操主簿至江南
詭曹義婢昔有八字黃絹初婦外孫壘曰操
不解問脩曰卿知否脩曰知之操曰且勿言待
朕思之行三十里乃得之今脩解脩曰黃絹
色絲色絲絶字初婦少女少女妙字外孫
女子女子好字壘曰受辛受辛辭字操曰
一如朕意俗云智無智技三十里云々

其智三十里も此古事をさるもれはるま句かえ
も彼負室老人吉那より何の若くはよく是れ
といひ捨てた今れ名を始るまはるるは
吉那よりく句さるか乃二十里ハ家執の女里より

瑞臨此子ちさくくふ心盛山ちりり此朝誦
此一白ちけ玉るるさしも貞室を揚脩く智
比一曹探々三十里此無智を花ももそ智と
す時裡家此身をかくくある乃酒着くく
を無あるく絶妙好舞舞の意ふ今ふ音する
か那妙する如花さるる山も日此の白
向ひくけ先く名吟する事平をあふく
春雨竹窓よおとら水いと果さるる日客あり
賓主坐さくくさくく云て云

梅咲やちやうふやうふやう思本奏

百八 九十二

此翁の句を知らずや予を以て此句を去り
しはあわしとよと又さくくくくく白此を
知らず人しあしと鼻をさくくくくく
引ちくくく客あり予は云て云俗談平初
御遊よあさや此是位のるを去りてや
ちやうふやうふやうとくちやうくく
幾すこちやうむふもいひずけも此
なすけも此とくくあはたし詞もく依君よ
ても不改よきふ詞もあし
君案此くく不宣なる外依渡玉く順徳帝
をけ先なり為兼けたた迂のりて八
歳大系此詞今よ跡此とくく梅咲

て其の長閑やうかきつたにつけく其の本意を
もつてけかちさるるを古言を立入たる物に社
佐州々をさるるの語を立入るるもそのこと
すんで京にたよりて少くもあつたことなれば
高きの御方への余光集へり
さるかの織物傳授の人へのめが思へり
めすんやうさるる
残考傳授の山中ウニのりの中紙すよ云同
玉よてウニ屋云又木ウニ竹ウニ石ウニ等此
紙様あり本名石炭云に佐長に尺ケ玉
あつて吳名さるる予う万物吳名鑑と委し
也す又金すへり

ハル 九十二号

陽とくしてハキとく候り松の心
月よりこのをろはくのうす
さるる片片をさるるをす
さるるの早も候り
伸かする入日と候る
心とあり一紙あり
又云さるる候るの候る
おのりろやさるるの候る
象更のすさるる何なり事
ぬと一つのむり

柴胡の系

或はよは柴胡の系と

ありとあやましく救荒本草曰柴胡乃
種類多し其門多の苗は似く類か者あり
と云然れは柴胡の系は必是せり其門多
白くして柴胡の系は必是せり其門多
此の系 竜の鱗やと云くは柴胡の系は
如くあれを知らんと知へし

八九 九四五

連加山峰よりかゝる漏脱の句

深川は松をかそくむ子代の美

山峯云深川は松をかそくむと子代乃

とめを雅申ふいひおこすやを謙は

意味の中庸なりむう或人のお徳といは

し寛永の洪水は勿体なくも

將軍家御馬を進めさせしれ今に松懸橋

の邊より御覽あるは洪水漸くして

長天をひきし一景 御同ふさきさるもの

てとよ木母寺に柵深川又本松のみ

又本松と云ふ所謂御嶽の弁天に松置の

の松を庭場の松松は稲荷乃知松は妙見

の松が有りは糸を只一面の水を有りと云ふ
愚考家々是れ松と云ふより少くはあり
今の八幡宮を寛文年中の近宮と云へ八幡
といふを砂村はありて今も猶その古跡を
跡にり是れ必え八幡の松成るべきもやと考
三有云ある松といふ所々金屋堀より西の方
原川大橋様江丁小名木川の岸に於て存する
久世侯の下を愛此内小ありて塚の上と云
おさる枝六七石身木の太サ三抱ありと云
て不巧注連を張てあるその注連を張る
由縁と云ふ所の人小少く寛永の頃小名木川
の所 所松の御所松のうちよりけ松を

百八十九十六

御覽やまは川筋は松を多くあれとも
是れ松と云ふ所の松と作られぬをとりまて
ゆつとて御の字をつけて所本松と云はれ
たりと云ふと云ふ所を裏押うつりていつ
五本松と云ふ所はれりといふ傳ふ云々
愚考え縁六年祖翁此句云本松といふ所
本を別して川上といふ川下や月友とあり
さすれを寛永より元禄まで六十年より
おとを子に於て本松と告いひ傳はし
と云ふ又此の原川は松をかそむとあれを
に本とて一本を本所柳崎妙尼の松とい
ふ本とてある所といふ所はれ左の古松小

對して白作りしるるを極なり程可考
 万葉のひとりり梅白や唐月夜
 を意此出合かいら和系の梅
 縁人の病々々々新む程梅山
 柳石小さそよや梅乃都人
 愚考梅の都人とも程波の隠し詞
 してかの小万柳ありと名はゆふと名はる
 帰系すすゝ若流は書るゝ柳也
 矢別 塚
 古川は程も目を張る柳クア
 白英やるゝささゝは消ぬへ

百八十九七

麻福田の禱よそりし去筆
 愚考柳亭不持万治年中作者志し
 百員息五二十評

萬かりそめ此嘆氣すそなる意風よ
 〇入るゝよおのひ 禱る 麻福太

立圃	重彩	梅盛	季吟	宗隆	元隆
任口	玄札	空存	道寸	移也	長治
竹犬	胤及	右十巴評	玄点		
西武	知光の事	貞室	麻福太	元中	
令他	安んじ	うら	西公梅	麻福太	い

未得 麻福大不器

正友 下西宮の

消島子 恥うぬろと書あけて云々
か附てありて京大坂江戸伏見の應々
も知れぬ麻福大進考

其風子吹おし笑おむものか
初瀬まで人々 不尼

凡そ

らかりする人もあつせれ山橋
山峯云々けしかれと云の言奇を云下
吹風子尾細うたのや大橋
愚考大橋一名素天一名上膳と云
後頼朝長山うけは渡さうあくる大橋

白丸十九八

退をやうこれてひく人もが
ておれ限くおま
かある跡を不そ
よやうくくお
その俚云を
大井尾よ
くくしての
ひひくけこ
されを木の
橋のむ乃
笑る飛う
細よて大の



象信渡よ

尾のとりくずれを大橋と号く
破山や橋をゆきる波の音

紀三井寺

尾上れを橋志すめて紀三井寺
深川や水くく小をみく
あよくをくくくむめを橋ちる

法師の第

画一

いささるに眼裏の埃抑持む
悪考心中のまを山捨得の傍
懸勤りなりていあるは花
君をくくく物くを莊子れ

白ハル九十九止

○麻福を 遊歩の山家うけ句をんす
思案を必を甲の人ぬく
しと志うやいむとわられ
ふやまりのまに小必定ちり
小をうけあは法師のつけて
幸後ま何くの景城よあつ
たかくすよるるそとりの
の名身わすれくうく
了阿上人よあよるの
くくあの上人こくハ
丸といよりの中をを
笑あて云落穂の

ちと世をば戸子角の法師が

は白装人而持の掛あそび画賛の句と

愚素守り一言傍未決の上てまををちうちく
りもあそびせびとあるへきてまををちうちく
へきてまををちうちく又云宗房とあれをとて
一涯よ是とありまををちうちく延喜天和の比
月名三人あり作者名あそびと云城沖とよえくま

唐詩の松と流より句

下総の秋陽とて門人玄或人の後よ厚多相院
の所製とてかきまの松のみまもあそびとて
つとまのあそびのは希の傍よれまもあそびと
はりてあそびとてまもあそびと

